

悪霊 第六部・貧民窟の聖女

悪
霊

第
六
部
・
貧
民
窟
の
聖
女<sup>マ
リ
ア</sup>

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道日市の地主の娘。川奈産業の大株主
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。夫を上海で亡くす。
猪俣佐和子……………党员。党の名前は井上。伊集院満枝の元クラスメイト
李麗姫……………元女性抗日パルチザン。満枝の仲間になる
佳代……………貧しい農家の娘。党のハウスキーパー
金沢文子……………安藤の養女
海老沼千恵子……………家出した資産家の娘。佐和子の配下となる
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。
安西健吉……………小百合の兄
安西信子……………小百合の母
増田喬……………小百合の夫。川奈産業社員。上海で事故死
磯田アヤノ……………小百合の叔母。華道の師範
磯田幸吉……………小百合の叔母の夫。高等小学校教師
磯田悦子……………東京に家出して小百合に救われ、磯田夫妻の養女になる
老人……………右翼の大物
黒木……………小沼と同じ国家主義団体のメンバー
大橋多喜蔵……………プロレタリア作家。党员。佳代と同居する。

- 三沢……………党中央委員。特高警察のスパイ
手塚……………「党」の戦闘的技術団メンバー。佐和子の直属の上司
安藤浄海……………元左翼の弁護士貧民街の僧
朴正烈……………朝鮮人青年
曾根……………党员

【時・場所】

昭和七年（一九三二）五月～八月。北海道日市、青森県弘前市、東京市、熱海

同じ頃。正確には昭和七年五月十五日の夕刻。

東京、帝国ホテルのロビイは、腕章をつけた新聞記者や、大きなフラッシュをつけたカメラを構える写真技師の群でごった返していた。

その喧噪を、ラウンジでコーヒーをすすりながら見つめるひとりの男の姿があった。地味ながら背広にネクタイをしめ、髪をポマードで固め、鼻に下に髭をたくわえている。

「いったい、なんの騒ぎだ……」

顔を顰めて眩くその傍らに、すっと人影が立った。

「チャアライ・チャップリンよ」

顔を上げた男の眼差しの先に、白い洋装の伊集院満枝がいた。満枝はにっこりと微笑み、向かい合ってソファに腰をおろした。

「お久しぶりね、小沼さん」

小沼——すなわち、かつて伊集院家の小作人で、その後、労働運動の活動家に転じた小沼健吾である。

不発に終わった昭和五年五月のメーデーでの武装蜂起以後、姿を消していた小沼が、プチ・ブルジョアかと思まがう姿で、伊集院満枝と会っている理由は、おいおい語る。

「チャップリンというと、アメリカの？」

「ええ」

寄ってきた給仕にソーダ水を注文しながら、満枝は頷いた。

ハリウッドの喜劇王チャップリンが来日したのは前日の五月十四日。今、両国の国技館での相撲見物に出かけているが、ホテルに戻ってきたところをつかまえて談話を取ろうと、記者たちは手ぐすねひいて待っているのである。

「お約束のもの、お持ちしたわ」

満枝はバッグから白い風呂敷に包んだ四角いものを取り出し、小沼に差し出した。小沼は中身も改めず、自分の鞆に突っ込む。

「しかし……」

小沼は言った。

「あんたも、妙なひとだ」

「なぜ？」

小首を傾げる満枝に、小沼は言った。

「労働運動をしていた俺が、党を裏切って転向した後も、こうやって資金援助をしてくれる」

「わたくしは党を援助していたつもりはないわ」

満枝は、笑みを浮かべて言った。

「あなたのお役に立ちたいだけよ」

「あなたのお父さんが俺にやった仕打ちへの、罪滅ぼしってわけか？」

「そうじゃないの」

満枝は身を乗り出し、小沼の耳元で囁くように言った。「わたくしは、あなたが何かしでかしてくれそうで……わくわくしてるだけ」

小沼はしばし満枝を凝視し、相変わずだな、と呟いた。

ロビイでの記者たちのざわめきが、不意に大きくなった。口々に何かわめき、走り出す者もいる。その喧噪をかきわけ、隣のテーブルに辿り着いた初老の紳士が、先に来て座っていた妻らしき女性に言った。「総理がやられたらしいよ」

「なんだって！」

小沼が立ち上がり、老紳士に詰め寄った。

「総理が……本当ですか？」

老紳士は困惑しつつ応えた。

「ええ、ロビイの新聞記者が言っておりますよ。軍人が首相官邸に押し入って拳銃をぶっぱなしたとか。いやはや、物騒な世の中ですな」

老紳士に一礼し、腰をおろした小沼の耳元に口を寄せ、満枝は囁いた。

「あなたたちも、今回の一件に加わるはずだったのね」

顔をあげて睨みつける小沼に、満枝は静かに続けた。

「それなのに、何も知らされないまま軍人に出し抜かれた……そうなの？」

「あなたは……」

小沼は口を開き、囁れた声で言った。

「俺たちのことには口は出さない、と言っていたはずだ」

「軍人は、民間人なんか信用しないものよ。わたくしは、満州でさんざん思い知らされたわ」

平然と言う満枝から、小沼は唇を歪めて眼を逸らした。

「政治家の二人や三人暗殺しても、世の中は変わらないわよ」

満枝は、バッグを手に立ち上がり、腰をかがめて小沼に耳打ちした。

「あのお金は、もっと大きなことに使っちゃおうだい」

踵を返し、満枝は去った。

その一時間後。

大磯にある屋敷の質素な一室で、小沼健吾は同じ年格好の男と並び、「敬天愛人」と墨書された掛け軸を背に着流しの兵児帯をしいて坐る老人の前にかしこまっていた。

「犬養は助かりそうもないらしいな」

茶をすすりながら呟く老人に、小沼は問うた。

「犯人は、軍人だけですか？」

老人は、うなずき「海軍だけのようだ」と答え、中尉・少尉クラスの青年将校が数名、後は海軍兵学校の生徒、と付け加えた。

「それだけの人数で……」

小沼と並んでいた男が、歯齧みして呻いた。

「何ができるといふんだ。犬養一人暗殺したところで世の中が変わるわけじゃないってことは、浜口の一件で分かり切ってるじゃないか」

同じ事を伊集院満枝も口にした……。小沼は、隣に座る黒木を見やって心のなかで呟いた。血なまぐさい時代であった。

前年八月、総理大臣の浜口雄幸が東京駅で右翼青年にピストルで撃たれて命を落として以来、今年に入って井上準之助元蔵相、岡塚磨三井財閥理事長が、立て続けにテロの凶弾に倒れた。

そして今日、昭和七年五月十五日、犬養毅総理が、官邸に押し入った青年将校たちの銃弾を浴びた。一味は、内大臣・牧野伸頭郎や警視庁も襲撃したが、いずれもさしたる成果はあげられずに終わっている。

「頭山や大川も、今日やるとは知らなかったらしいぞ」

老人は言った。頭山満、大川周明。ともに民間右翼の大物である。

「困ったものだ……軍人は民間人を信用しようと思えん」

老人のつぶやきに小沼はまたも、同じ事を伊集院満枝が口にしていたと思いついて出していた。

「国家改造のためには、広汎なる大衆を巻き込まねばならぬことが分かかっておらんのだよ」

垂れ下がった白い眉毛に半ば隠された老人の眼差しが、小沼に向けられた。

「そのあたりは、軍人も、共産主義者も、変わるところはないらしいな」

小沼は黙して答えなかった。

そう……。

二年前の五月。小沼は「党」の指令で武装蜂起を実行すべく同志をかき集めた。だが、青臭いインテリで構成される「党中央」の、高圧的で朝令暮改な姿勢のために挫折した。その後、ほとんどの党幹部が検挙されたため、小沼と「党中央」の連絡は途絶えた。

三沢を中心として新しく組織された「党」は、小沼と連絡を取ろうとはしなかった。絶望した小沼は、転向したかつての仲間を誘われるまま、右翼団体の一員となったのである。

前年九月に勃発した満州事変に呼応して、国家改造を目指す動きが始まっていた。急進的な青年将校と民間右翼が集まって練られた計画は、壮大なものであった。まず右翼が組織した民間人が帝都各地で暴動を起こし、その混乱に乗じて軍隊が帝国議會を包囲、内閣総辞職と議會解散を突きつける。さらに戒厳令を公布して憲法を停止し、最終的には軍部独裁政権を樹立する……。

帝国議會では、政友会、民政党の二大政党が醜悪な争いを繰り広げていた。未曾有の不況に喘ぐ大衆の苦しみをよそに、政党政治家は財閥と結託し、買収、収賄は日常茶飯事であった。外にあっては、支那の抗日の動きは已まず、宿敵ソビエト連邦はスターリンの指導のもと着々と計画経済の実をあげつつある。この国難を乗り切るには、外にあっては満州建国、内においては議會政治の廃止、軍主導の国家改造しかない……。それが、謀議に参画した軍人や右翼の共通認識であった。

満州建国は達成した。支那の抗日運動やソ連の脅威はこれで抑えられるであろう。だが、肝心の国家改造はどうか。計画は練られては流産し、軍人と民間右翼の齟齬が生まれ、挙げ句の果てに、軍人が暴走した。しかもやったことはテロルにすぎない。犬養総理が仮に命を落としたとしても、すぐさま次の後継首班が指名され、今と代わらぬ政治が繰り返されるだけのことだ。

「おっしゃるとおりです」

小沼は口を開き、老人の前に膝を進めた。

「大規模な大衆動員なくして、革命の成功はありません。われわれは、軍の兵力に頼るのでは

なく、大衆の組織に力を尽くすべきです」

今まで数々の蜂起計画が流れたのは、軍人たちが新たに樹立される軍部独裁政権の首班に、宇垣一成や荒木貞夫ら大将クラスの軍首脳を担ごうとしたからだ。担がれた軍首脳の反応は様々であったが、結局、土壇場になって逃げ腰になった彼らから中止命令が出される。この繰り返しであった。

「国家改造を唱える青年将校たちは、なぜ自ら首班となって国家改造にあたらうとしないのか。なぜ、青年将校の間に一人のレーニンも生まれることがないのか。私はそれを遺憾に思います」

「では……」

老人は眼を細めて口を開いた。

「あんたが、そのレーニンになる覚悟はないのかね？」

鹿兒島生まれ。二十歳を前にして、西郷隆盛が決起した西南戦争に参加した経歴を持ち、以後、明治大正昭和の三代にわたって民間右翼に隠然たる影響を及ぼし続けてきた齢八十の老人の笑みと短い言葉が、鋭く小沼の胸を射抜いた。

「無理であろうな、君が自らレーニンとなり、陛下を弑殺し奉るなど……。あるいは、君が参加しておった党の連中ならば、それをやれたかね？」

小沼はたじろぎ、何も答えることはできなかった。

「ご老体、とんでもないことを口にする」

老人の家を出て、駅へと向かいながら黒木は言った。黒木は、小沼と同じ国家主義団体に属す

る仲間である。

「陛下を弑殺……われわれには、思いも及ばないよ」

「覚悟……か」

小沼は、老人の言葉を脳裡で反芻しつつ呟いた。

「たしかに、党にもそこまで覚悟を決めていた奴は、一人もいなかった」

「なにか喰って帰ろうぜ」

黒木に促され、二人は駅前の蕎麦屋に入った。向かい合って座り、注文を終えた後、小沼は鞆から白い布包みを取り出し、黒木の目の前に置いた。

「こいつを預かっていてくれ」

「例の、地主のお嬢さんからの寄付かい？」

「まあな」

そっと布包みを開けて中身を確かめてから再び包み直し、自分の鞆に入れながら黒木は溜息をついた。

「すごい額だな……」

「いつものことさ」

小沼は不快げに言った。

「党にいたところから、かなり援助してもらっていた」

「しかしね、君」

黒木はいたずらっぽい笑みを浮かべながら身を乗り出した。

「いくら自分の父親が、小作人だったころの君にひどいことをしたからと言って、これだけの金をぼんと出してくれるってのは、どう考えてもおかしいぜ」

「じゃあ、他にどんな理由があるんだ？」

「たとえは……君に惚れているとか」

馬鹿を言うな。そう言い返しつつ、小沼は、かつて満枝を陵辱する淫夢に耽っていたことを思い出し、顔が熱くなるのを覚えた。

翌朝。

帝国ホテルのスイートルーム。朝の光に眼を醒ました伊集院満枝は、昨夜着ていたフリル付きの黄色いワンピース一枚で、うつぶせにベッドで寝ていることに気づいた。

あのまま、寝てしまったのか……。

のろのろとからだを起こし、ベッドの上に座る。下半身につけていたはずの下着は、床に放り出されていた。

そうだった。昨夜はホテルに戻ってから、服を脱ぎもしないで自慰に耽り、そのまま寝入ってしまったのだ……。

苦笑いを浮かべ、両手を伸ばして欠伸をひとつ。眼を閉じると、あの男の顔が浮かんできた。恐怖と苦痛にひきつった顔が。

昨夜、ホテルのロビーで小沼健吾と会い、用意した金を渡した後、満枝はモダンガールの装いで銀座に向かった。服部時計店の前で人待ち顔で立っていると、声をかけてきた紳士がいた。ダ

ブルの背広に身を固めた、四十がらみの温厚そうな男性である。

誰か待っているのかな？ ええ、もう一時間も待っているんだけど……もう帰ろうかな。どうかね、よかったらお付き合してくれないかね。わあ、よかった、お腹べこべこだったの。

そんなたわいない会話をかわしながらタクシイを呼び、向かった先は麻布の洋館だった。妻と別れたばかりの独り暮らしでね。そう言いながら紅茶を淹れる男の背後に忍び寄り、睾丸を蹴り上げた。呻いて倒れた男の頭部を蹴って失神させた。

男が、レストランやカフェではなく、自宅に誘ってくれたのがもっけの幸いだった。人目を気にすることなく、じっくりと楽しめるのだから。

満枝は男の両手を背中にして縛り上げ、猿ぐつわをかませた。その上で柱に縛り付け、ナイフでズボンを引き裂き、すでに腫れ上がった男の睾丸を指で弾いた。男は激痛に呻き、眼を覚ました。

「これから、あなたを去勢するわ」

愕然と眼を見開く男を冷笑しつつ、満枝は言い渡した。

「痛いでしょうけれど、我慢してね。わたくしなんかを誘ったのが運の尽き。諦めなさい」

言いつつ、膝で蹴り上げる。男は激しくのけぞり、身を左右に揺すった。つぶった眼から涙が滴り落ちる。そんな男の顔を見つめつつ、再び膝蹴り。男は号泣し、身を震わせて悶えた。

手で陰囊を掴んでみた。内出血を起こしているらしく、睾丸はほどよく膨張している。

「今から、これをあなたの睾丸に突き刺すわ」

満枝はハンドバッグから竹串を二本取り出し、男の鼻先に突きつけた。鋭い切っ先を見て、男

の顔は風に吹かれる薔薇コンニャクのように震えた。

「抗日パルチザンが、捕虜を拷問する時に使う方法だそうよ……どのくらい痛いものなのか、女のわたくしには分からないけれど、一度やってみたかったの」

男は、絶望のあまり滂沱ぼうたの涙を流しつつ、猿ぐつわに覆われた口の奥で、最後の懇願を試みた
が、耳を貸す満枝ではなかった。

竹串が、男の睾丸を一個指し貫いた時、男の全身は電気を浴びたように激しく痙攣けいれんし、そのまま失神した。もうひとつの睾丸にも竹串を刺すと、失神したまま、からだだけが反応する。

最後に、もう一度膝蹴りを喰わせると、すでに串に貫かれて決壊寸前だった睾丸は破裂した。陰囊は見る見るうちに瓜のように膨張し、串によって開けられた穴から、大量の血と精液が噴き出し、満枝の脚を濡らした。満枝はそのままタクシイを拾ってホテルに戻り、部屋に入るなり下着を脱ぎ捨て、ベッドで己が陰部を弄びはじめたのだった……。

スカートの裾に、男の返り血らしい染みがついていた。これはもう捨ててしまおう。満枝はワンピースを脱ぎ捨て、屑籠くずかごに放り込んだ。浴室に入ってシャワーを浴び、白いガウンをまとって部屋に戻ってきた満枝は、ドアの下に差し込まれた手紙や電報の束を確認しはじめた。北海道の本社から、満州から、上海から、指示を求める電報が毎日のように届けられる。その一つ一つに丁寧に通し、メモを取る満枝の面差しは、すでに実業家のそれであった。

ふと、一通の電報に満枝は息を呑んだ。差出人は、篠原ヨシだった。

アンザイサンヨリデンボウ メンカイモトム シジヲマツ

安西小百合あんざいさゆりが面会を求めている……？

満枝は電報を置き、眉をひそめ、額に手を置いて考えをめぐらせた。篠原ヨシに持たせた小切手を、小百合が受け取りを拒絶し、説得されてもお「破り捨てるかもしれない」と言ったことは、すでに聞いていた。当然だろう……。沈痛な気持とともに、満枝はそう思った。やはり、小百合は自分のことを憎み、恐れている。そのことが、満枝にはひどく悲しかった。

その小百合が、自ら面会したいと言ってきた。どういうこと？

心臓が早鐘を打ち、胸が苦しくなっていくのをどうすることもできなかった。思うまま罵倒するつもりなのだろうか。

どうしよう……。

満枝は椅子から立ち上がり、わが身を両腕で覆うようにして部屋じゅうを歩き回った。

その二日後の夜。

伊集院満枝は、久しぶりに北海道日市の自宅の居間で食事をとっていた。

「これは、牧場でとれたものなのね」

ヨシが手ずから焼いたビーフステーキにナイフを入れ、口に運びながら満枝は問うた。

「やわらかくて、とても美味しいわ」

「ありがとうございます」

ヨシは微笑んで頭を下げた。

満枝が父親から受け継いだ莫大な農地は、篠原ヨシが管理している。小作人の待遇を改善したため。収益は若干減ったが、土地を増やして新たに牧畜をはじめると、新たな試みが実を結び

つつあった。

「お嬢様も、ご機嫌ですわね」

静かに問うヨシに、満枝は唇を結んで首をかしげた。

「そうかしら？」

「お出かけになる前は、とても緊張していらしたご様子でしたの……何か、よいことがおありでしたの？」

満枝はナイフとフォークを置き、背筋を伸ばしてから口を開いた。

「小百合さんに会ったの」

「そういえば、今日でございましたわね」

その日の昼過ぎ、日市に着いた満枝は、ホテルのレストランで小百合と会った。その後、自宅に帰ってきたのだ。満枝は言った。

「小百合さん、ヨシに届けてもらった小切手を持ってきていたわ」

ヨシは口を噤んだ。あの時の小百合は、本当に小切手を破り捨てかねない剣幕だった。それをわざわざ満枝に会うために北海道まで持ってきたのは、なぜなのか、理由をはかりかねた。

「それでね……ヨシ」

満枝は微笑んで眼を細めた。

「小百合さんってとても律儀なひとなの。まず最初に、ヨシに大変失礼な態度をとって申し訳なかった、謝っていたと伝えてくださいって頭を下げるのよ」

「……………」

「それからね、お志は有難くお受けしたい。ついては、大金が要りようになったので、この数字を書いて銀行に持っていきたいのだが、よろしいか、と」

「大金……ですか？」

「そうなの。いくらだと思う？」

「さあ……」

「驚かないでね……二十万円よ」

ヨシは腰を浮かした。現在で言えば一億円に相当する額だ。満枝の資産からすれば、一部ではないが、夫の死に対する見舞金にしては破格とっていい。あの、真面目でおとなしそうな女性、満枝に面と向かってそんな多額の金を要求するだろうか。

「それで……お嬢様はなんと？」

「驚いたけれど、仕方ないわ。好きなだけ金額を書いていいって言ったのは、わたくしのほうだもの」

「そうですか……」

ヨシは眼を伏せた。満枝の個人資産から出す以上、ヨシが口を出すことではない。

「それで、そのお金、何に遣うのか聞いてみたの。小百合さんはどう答えたと思う？」

「さあ……」

「小百合さん、そのお金を元手に孤児のための寄宿舎つき学校を建てたいんですって！」

満枝の声がうわづつていた。

「あの無口でおとなしい小百合さんが、そんなことを思いつくなんて、わたくし感動したわ。ま

ず孤児院についていろいろ勉強したり、全国の孤児院を見てまわったり、外国の施設を見学したりした上で、土地を買って理想的な孤児院を作りたいのですって」

興奮のあまり立ち上がって喋り続ける満枝を、ヨシはあっけにとられて見つめた。

「一番嬉しかったのは、孤児院を運営するためには、相当なお金が必要らしいから、今後とも、寄付をお願いしたいって言われたことよ！」

満枝は天井に顔を向けて叫んだ。

「あの小百合さんが、私を怖がっていた小百合さんがそんなことを……奇跡だわ！」

その頃。

安西小百合は、実家の自室で本を開いていた。数日前、図書館で借りてきた児童問題の研究書である。ところどころノートを取っていると、「入っていいか？」と声がした。兄の健吉である。

小百合は本とノートを閉じ、座っていた座布団を裏返して、目の前に置いた。地元の会社（けんきち）に勤める兄は、小百合の五歳上。亡き夫・喬の高校の先輩であった。

入ってきた健吉は、差し出された座布団の上で胡坐（あくら）をかき、口を開いた。

「お前、孤児院を作るんだって？」

小百合が父と母に打ち明けたのは、夕食の席であった。兄はその日、残業のため帰りが遅かった。夕食後、小百合が自室で本を読んでいる間に帰ってきた兄は、父母からその話を聞かされたのだろう。思いとどまるよう説得してくれ、と言われたに違いない。

小百合は黙ったまま、深く頷いた。

「そうか……お父さんもお母さんも、反対なすつたろう」

再び無言で頷く小百合に、健吉は溜息をついた。

「それでもやると言うのかい？」

小百合はまっすぐに健吉を見つめて頷いた。

「また、突飛なことを思いついたものだが……だいたい、孤児院ってどうやって開くものだから、お前、知っているのかね？」

「これから勉強するわ」

「おいおい、頼りない話だなあ」

「お兄さま」

あらためて居ずまいをただし、小百合は言った。

「喬（たかし）さんは、とてもよい夫でした。よい方をご紹介くださって感謝しています」

健吉は眼を伏せた。学校の先輩だった増田喬を小百合に紹介したのは健吉だった。尊敬する先輩の死は、彼にとっても深い悲しみであった。

「だから、わたくし、喬さん以外の方に嫁ぐつもりはないの。いとしい方に先立たれる悲しみは、もう味わいたくないから」

「え……？」

再婚すれば、その相手の男が必ず死ぬと決めつけたような口振りに、健吉は眼を丸くした。その理由を訊ねようとする前に、小百合は静かに続けた。

「お金は、伊集院さまが援助してくださることになったわ」

「伊集院満枝さんかい？」

「ええ。わたくしが孤児院を開きたい、そのためにうんと勉強したいと申し出たら、快く」

増田喬は、伊集院満枝の命によって赴いた上海で亡くなった。満枝が、その責任を感じて援助を引き受けたのならば、辻褄はあう。

「伊集院さんが後ろ盾ならば、そう心配することもあるまいが……」

健吉は呟いた。普段はおとなしいが言い出したら退かない、頑固な妹の氣質をよく心得ていた。

兄が去った後、小百合は再び文机に向かった。

小百合が孤児院を開こうと決意したのは、悦子が背負った心の傷の深さを知った時だった。悦子と同じ境遇にいる子どもたちを救いたい。実現できたら、ぜひ悦子にも手伝ってもらおう。

図書館へ行き、孤児院について書かれた本を借りて読んでみた。多額のお金が必要だとわかった時、篠原ヨシが持ってきた小切手のことが頭に浮かんだ。

小百合は覚悟を決めた。

伊集院満枝は、これからも自分の人生に関わってこようとするに違いない。それがなぜかは分からない。小百合は、満枝が山中で白痴を去勢したのを見た。I高等女学院のチャペルで猪俣佐和子をそそのかして許婚者を去勢させたのを立ち聞きした。そのことを満枝は知っている。それが、満枝が小百合につきまとう理由なのかどうかは知らない。

いずれにせよ、小百合がどんなに逃げようと、満枝は追ってくる。ならば、もう逃げるのはよそう。いっそ、あの莫大な財産から必要なお金を引き出して、自分の夢を果たそう。

そう決めたとたん、長い間心の底に沈んでいた重石が取れたように感じた。

もう怖がらない……。

小百合は、本をめくりながら、声に出してそう呟いた。

そんなにわたくしに関わっていたいのなら、せいぜい利用させていただくわ。